

たかもとしめい 高本紫溟の和学

柿本加奈

序

近世中・後期の熊本藩は、賢公として知られる藩主・細川重賢の影響もあり、秋山玉山を筆頭に優れた学者の多く存在する地であった。彼らが織りなす学問的交流は全国的に見ても興味深いものであると思われるが、今回の論で取り上げる高本紫溟は、その中に於いても個性的な面を持っている。

彼は、熊本藩の儒者として勤めた人物であり、教授としては秋山玉山、藪孤山やぶこざんに続いて三代目に当たる。藩校・時習館に於いて教授職は総教に次ぐ位置にあり、勉学上の最高職であるが、その職に相応しい人物がいなければ欠員とすると定められていた。この教授の職にあったこと、また、藩命により藩主・細川重賢の伝記『銀台遺事』の編纂を命じられたことから、彼が優れた儒者であったことの一端が窺えるだろう。

しかし、現在まで彼個人を扱った論文は殆どないと言つて良く、その人物研究は武藤蔽男編『肥後先哲偉蹟』正統

合巻、後編（隆文館、明治四十四年七月、昭和三年七月、以降『先哲偉蹟』と略す）や熊本市役所編『熊本市史』（臨川書店、昭和七年初版、昭和六十一年復刻版）、新熊本市史編纂委員会編『新熊本市史』（平成十五年三月）といった郷土史研究に見られる程である。だが、それらの記述からは、前述した、紫溟の他とは異なる個性的な面が窺える。それは、藩校の教授としての優れた儒者の面を持ちながら、和学にも精通していたというものであり、和学を重視する彼の存在が、後の熊本に於ける国学興隆の礎になったとも評されている。そのような面から、「儒学者でありながら、国学も疎かにしない」として語られることの多かつた彼であるが、本稿は、その高本紫溟の和学とは如何なるものであつたかを考察していこうとするものである。

本論に入る前に、先ずは紫溟の略歴を記す。以下の記述は『先哲偉蹟』巻三「高本紫溟」項に所収の諸資料、熊本市役所内 秋山高本二先生追遠会編纂・発行『玉山・紫溟両先生略伝』（明治四十五年四月）等を基にした。

高本紫溟、元文三年（一七三三）に生まれる。名を順、字を子友、初め慶藏と称し、後に敬藏と改める。号を紫溟。本は藩医・原田宗昆の末子として生まれたが、幼時に同じく藩医である高本玄碩の養子となる。高本氏は、文禄の役の際に朝鮮半島より捕らえられてきた李宗閑を祖とし、紫溟はその五代目となる。紫溟が姓を李氏と名乗るのはこの為である。

紫溟は幼い頃より、父から厳しく学んだとされる（『先哲偉蹟』所載「池松筆記」に、素読などを受ける際には、群がる蚊を払うことも許されなかったという挿話がある）。そのようにして学んだ成果か、紫溟は幼くしてその才名高く、詩を能くし、時習館教授・秋山玉山もその才を愛して「国、又一詩家を獲ん」と語ったという。玉山と紫溟に關しては次のような挿話もある。或る日、玉山は紫溟に夜遊を勧めた。しかしその年は飢饉で庶民は飢えていた。そこで、紫溟が「葛根ほる岡の翁の苦しみを知らでや人の遊びゆくらん」と詠み、誘いを辞した所、その歌を受け取った玉山は遊行を止めたという。それが紫溟、十六歳の時である。

宝暦年間（一七五一—一七六三）から七、八年阿蘇山に隠棲するが、明和四年（一七六七）に養父玄碩の死に

より家督を継ぎ、外様医師組を仰せ付けられる。同八年（一七六九）、儒者に召し直され、時習館訓導となる。安永二年（一七七三）世子治年の近習監となり江戸藩邸へ赴く。二年後の同四年、治年公の下国に伴い帰国、訓導に復帰する。天明六年（一七八六）には時習館助教となり、同八年、教授職に就く。この後紫溟は没年まで教授職にあることになる。詳細は今回割愛するが、寛政九年（一七九七）から五度に渡る辞職願いを出すも、藩主から保養と赴館の免除まで言い渡され、なおも教授職にあるよう請われたことは、紫溟の優れた藩儒としての面を窺うに足る出来事だろう。文化九年（一八一二）に職を辞し、翌年の文化十年十二月二十六日に没す、享年七十六歳。

第一節 同時代の肥後の和学

紫溟自身の和学の前に、まずは同時代の熊本に於いて、紫溟の他に和学を能くする人の存在を確認しておく。紫溟よりは前の時代になるが、辛島古淵（一六三一—一六九三）、井澤蟠龍（一六六七—一七三〇）等が挙げられる。古淵は、初め宇土支藩に仕えていたが、辞して京都に出、山崎闇斎に学んだ。後、本藩に召し抱えられ、藩侯の命により肥後の名所旧跡を調査して地誌の編纂に携わっ

た。蟠龍は、江戸に在った時に、山崎闇齋門下に就き垂加神道を学び、熊本に国学を伝えた。その著書も数多く、傑出した人物だと言える。

その後は、紫溟とほぼ同時代の、伊形靈雨（一七四四—一七八七）が出る。紫溟とも交流があり、互いの詩集にその名が見えるなど、盛んに行き来があつたようである。元は玉名郡木葉村の農民だったが、藩命で京都に遊学し、滋野井公に職原抄研究を学び、帰国後は時習館で詩文・国学の師となつている。

更に、紫溟と浅からぬ関係のあつた人物を述べれば、阿蘇神社の官司である阿蘇惟典、またその息子惟馨がいる。紫溟は前述の通り、阿蘇に七、八年の間庵を結んでいたことがあり、その名を「萬松廬」というが、惟典は紫溟にこの地に庵を結ぶことを許し、賓師として迎えた。紫溟の許には身分の上も下もなく、様々な学者達が訪れていたという。紫溟もまた、この時に阿蘇家の古典籍の蔵書に触れて、研鑽を積んだと推察され、それが後々まで彼の和学の大きな部分を占めていたのではないだろうか。そのような日々の中で、紫溟は阿蘇の風土を詠んだが、この時の詩歌を収めているのが後述する「阿蘇布理」である。

この後、紫溟は時習館の講師に請われた為に阿蘇を去る

ことになるが、文化六年（一八〇九）、阿蘇に赴き滞在した際に、論語の講釈を行い、阿蘇氏の家塾の記を惟馨に請われ、草している（※本稿末に掲げる）。また、紫溟が萬松廬に在った時、自作の詩を石に彫り庭に建てたが、彼が阿蘇を去つてからは阿蘇氏の庭に移され、主無き萬松廬は荒れてしまつていた。紫溟没後、これを愁えた後の天保（一八三〇—一八四四）の頃の阿蘇家大官司・惟治が石碑を元の萬松廬址に戻し、「萬松廬八首^{（後2）}」の五字を記して、紫溟を称えている。斯様に、紫溟と阿蘇家の関わりとは深いものだったと言える。

第三節で述べる本居宣長とも関係のある人物といえ、山鹿郡久原村天目一神社の神主であつた帆足長秋は、天明六年（一七八六）に熊本で初めて本居宣長の門人となつており、彼の入門によつて熊本の国学は発展したとされる。これも後に述べる紫溟の弟子である長瀬真幸も、長秋を通じて宣長の国学に興味を持ち、門人となつている。

阿蘇大官司家や、長秋、後述の宮川糺など、その他宣長の門人録に見える人々は、殆どが神職にある者であり、前に挙げた辛島古淵、井澤蟠龍も垂加神道の教えを受けている。『新熊本市史』ではこれを「民間の国学が神道中心であるのに対して、時習館の国学は文学・歌学中心の性格が

濃いと言えるのではないか」とする。また、紫溟が在野の学者ではなく、藩儒、しかも後には藩校の教授という身分だったことも考慮すると、この当時の熊本に於ける和学者としての紫溟の存在は聊か特異なものだったと言えるのではないか。尚、郷土史家・上妻博之氏による「本居宣長と肥後人」（雑誌『日本談義』昭和二十七年九月十一月号）に於いても、宣長門人となつた熊本の人物について調査されている。

また、弥富破摩雄著『契沖と熊本』（昭和四年五月）では、紫溟が和学の知識・思想を育んだ場として阿蘇家の存在を挙げ、熊本には、阿蘇家から出た肥後独自の国学と、帆足や後述する紫溟の門弟・長瀬真幸によつて導入された鈴屋の国学との二流があつたと主張する。鈴屋の学が持ち込まれる以前に肥後には阿蘇家によつて契沖の学が存在しており、後の熊本に於ける国学興隆は真幸によつて導入された宣長学よりも寧ろこの影響があつた故としてゐる。

第二節 紫溟の和歌・和文

現在、紫溟の和歌をまとめて見られるのは、武藤巖男・宇野東風・古城貞吉編纂『肥後文献叢書』第二卷（歴史図書社、昭和四十六年七月、以降『文献叢書』と略す）に収

められている「高本順大家集」（以降、「家集」と略す）であろう。『文献叢書』の編者の一人である宇野東風氏が明治三十九年に記された序文によれば、宇野氏が紫溟の和歌で残存しているものを集め、写しておいたものをまとめたものである。紫溟自身が残した歌集ということではないが、抑もあまり多くは残されていない紫溟の和歌を集めてあるだけでも価値があると云つて良いだろう。その内容は、「長瀬真幸ぬしをおくる歌并序」、「詠百首和歌」、「春江花月夜」、「をりくくの歌」、「阿蘇布理」となつてゐる。その内容を簡潔にまとめると次のようになる。

「長瀬真幸ぬしをおくる歌并序」——紫溟が弟子・長瀬真幸の伊勢・京への遊学の際に渡したものの。次節で詳述する。
「詠百首和歌」——「神祇」、「月」、「風」等の二十五の題につき四首ずつ、計百首を詠んだもの。

「春江花月夜」——「春の夜友たちとひ来て物かたりするついでに春江花月夜といへる詩を句題にして歌よめといへればよめる」とあるように、唐の張若虚の七言三十六句の長詩「春江花月夜」の句を題にして詠んだ三十六首。阿蘇惟典の名前も見え、萬松廬で詠んだもののか。

「をりくくの歌」——「花」や「七夕」といった題の歌や、「阿蘇の萬松廬をおもひやりて」、「時習館のありさまのや、おとろふるにつけて」、臨終の際の歌など内容は多岐に渡つ

ているが、歌の並びにはややまとまっていない印象を受ける。後述の、高山彦九郎へ贈った歌や、本居宣長との贈答歌、阿蘇惟典・惟馨との贈答歌等も収められている。

「阿蘇布理」——阿蘇での年中行事やその景観を詠んだ歌に、説明が付されている。恐らく阿蘇での隠棲時代の作であろう。

この他、紫溟の和歌を集めたものに「高本大人遺文」（上妻文庫68所収、昭和十七年写）があるが、これは熊本県立図書館蔵・上妻文庫に収められており、宇野氏の写しを多く含む為「家集」と収録内容が重なっているが、中には「家集」に未載の歌も含まれている。以下にその詳細を挙げておく。

収録されているのは「阿蘇不里」、「春江花月夜」、「鈴鹿川 長瀬ぬしをおくる歌并序」、「詠百首和歌」、「高本順大人歌集」、「をりくくの歌」となっている。「阿蘇不里」から「詠百首和歌」までは『文献叢書』所収のものと同じである。「高本順大人歌集」は「肥後文献叢書巻二」に「をりくくの歌」と題せりと記してあるが、『文献叢書』の「をりくくの歌」そのままではなく、大正元年発行の「高本順大人百年祭記念 先哲遺稿」（河島豊太郎編、河島書店、大正元年十一月。以降、『先哲遺稿』と略す）に「鈴鹿川」とされている箇所を参照して写したもののようだ。『文献叢書』に未載の

歌も二十三首ほど見られる。「をりくくの歌」は、『先哲遺稿』に無く、『文献叢書』にあるものを抜き書きしたものとなっている。

『先哲遺稿』が大正元年の発行であり、それを参照した「高本順大人遺文」が昭和十七年の写で、「家集」より後の成立ということもあるだろうが、内容が整理されている印象を受ける。それは、例えば歌の並びが「初春待花」、「暮春郭公」、「梅雨晴」と、春夏秋冬の順になっていたり、本居宣長に関する歌はまとめてあるなど、内容を考慮した並びになっている為だろう。なお、上妻氏が参照した『先哲遺稿』には、紫溟の歌が十二首追加して載せられているが、これは『文献叢書』にも「高本大人遺文」にも見られないものである。

その他、歌文という訳ではないが、紫溟の和学に対する態度の顕著に表れたものとして、『先哲偉蹟』所収の資料から、国学相誘の建言を挙げる。文中の（ ）は私に補った。寛政四年（一七九二）、紫溟から「学校方 御奉行中様」へ。

御当国之儀は、以前は井澤十郎左衛門（蟠龍）など、名高き国学者有之候所、近年一向中絶仕候に付、当年よりは国学相誘、諸生の内必多度会説等仕せ候筈に御座候所、時習館御間差支、其儀難相成御座候、依之頃

日御達申候、習書齋御建継被仰付候者、其内にて少々御間取分け、国学の所に仕度奉存候間、旁以御達申候通の間数、御建継被仰付下候様、猶又奉願候以上、
閏二月二十日 高本慶蔵

この内容は、当国（熊本藩）には以前は井澤蟠龍など名高い国学者がいたのに近年その流れが絶えてしまつてゐる。故に国学の講義を行いたい、ついでには、その為の部屋を都合してもらえないか——というものだった。これより遡る閏二月十二日にも紫溟は同様の申し出をしているが、それは紫溟が和学を尊重していることをより物語つてゐる。曰く、林家では和学科も置いているのに、当国にはそれが無い、いくら唐の歴史を覚えても、六国史等に疎いようでは、隣家の系譜を覚えて自らの先祖を知らないようなものだといふ強い訴えだが、対する返答は、

〈付紙〉 前文略 国学之儀も講堂歟、又は夕飯後にても明候間御考、会読有之候様

三月七日 御奉行中

というものであった。ここに、紫溟の和学への強い思いと同時に、この当時の藩の学問の指向との差異が窺える。

この件について、『新熊本市史』では、民間には帆足長秋らの国学者が出て来ていたが、時習館での国学講座開設は紫溟のこの建言を待たねばならなかったとし、「以後国学研究に道が開かれることとなつた」と締め括つてゐる。だが一方、『略伝』では、「当時の有司、眼光微にして未だ国典の尊きを知らず、本末を顛倒して、却て之れを余事の如く思ひ居たるなり」と評する。つまり、『新熊本市史』では触れられていない、奉行所の返事に対する紫溟の落胆を示しているのだから。その建言の結果について『新熊本市史』では、国学師範の初代に紫溟が、二代目に長瀬真幸がなつた、とだけあるが、『略伝』では「故に先生（紫溟）止を得ず、日々館中他学科の講習終るを俟ちて、其教室に有志の徒を集め、門下の高足長瀬田廬（真幸）と共に、記紀律令等を講じ、大に尊王の説を鼓吹したり」となつてゐる。「止を得ず」という言葉には、奉行所の返答が、紫溟としては満足のいくものではなかつたということを端的に表している。この多少の受け取り方のズレを、どう捉えるべきか。ここで『先哲偉蹟』に載る資料を挙げる。

右一卷、府学教授高本先生所上官書也、若使先生果遂其意、則自寛政壬子春、至弘化丙午今、既五十有五年矣、皇国之学、盛行于吾藩、広学雲興、英傑並出焉、其間必有命世間出才、則吾道復古、可数日以待已、豈可不

謂不朽盛舉乎、惜哉、嗚呼道之難行也、(後略)

これは紫溟の弟子・長瀬真幸の弟子である国学者・林櫻園が、後の弘化三年(一八四六)に前の紫溟の建言に就いて記したものであるが、もし紫溟の希望がその通りに叶っていたなら、今頃はもつと多くの優れた国学の才を持つ者が出ているだろうにと、当時の藩の態度を嘆いている文章である。この記述からすれば、やはり『新熊本市史』の記述は舌足らずで、『略伝』の方が適当かと思われるのだが、当時の実際がどうであったのかは、推察の域を出ない。しかし、この件から紫溟が時習館に於いて和学の授業を開講したことを、和学を尊重する意思を備えていたことが判る。

第三節 本居宣長との交流

前節で少々触れたが、紫溟の弟子である長瀬真幸は、国学者・本居宣長の門人となり、自身も万葉集の研究などで国学者として名を残した人である。その真幸と紫溟、そして宣長を巡っては、興味深い交流があったらしい。『続肥後先哲偉蹟』巻七「長瀬田廬(真幸)」の項の、「田廬翁行状略」(明治九年六月 男 長瀬五十槻謹識)によると、真幸は寛政五年(一七九三)に「師(紫溟)の計らひに因て、遊学の願を出し」、京から伊勢に到って宣長の門人と

なっており、その後再び寛政八年にも宣長の許に学び、翌九年には紫溟と共に伊勢へと向かっている。該当箇所を引用すると、「寛政九年二月二十一日、高本師同伴京に登り、嵐山の花を見、奈良に到り、所々名勝の地を經歷し、吉野に登山して花の満開を賞覽し、紀行アリ伊勢に越本居師に行く」とある。この「紀行アリ」とあるのは、熊本県立図書館蔵・上妻文庫の『遊京雑歌』(上妻文庫65、昭和十四年写)のことであると思われる。因みに、『遊京雑歌』は『国書総目録』にも記されておらず、上妻博之氏による巻末識語でも、この書の成立に就いては判然としないのであるが、後述する伊勢菅相寺での紫溟と宣長の贈答歌も見え、貴重な資料であると言えよう。

さて、「田廬翁行状略」に戻ると、先程の引用箇所の後、「高本氏此時本居師の門弟となれり」と続くのであるが、紫溟が本居宣長の門弟となったという記述はこれ以外の幾つかの資料(例えば、『略伝』には「師弟の約を結ぶ」とある)に見られるものの、宣長の門人録、「授業門人姓名録」(大野晋、大久保正編集校訂『本居宣長全集』第二十卷所収、筑摩書房、昭和五十年八月)中には紫溟の名は見られない。寛政五年の項に真幸の入門は記してあるものの、紫溟が真幸と共に伊勢に向かった寛政九年の項にも、その後にも、紫溟の名前は見当たらないのである。これについては上妻

氏も、「長瀬真幸伝(二三)」（雑誌『日本談義』昭和三十六年六月号）にてその事情を、紫溟が当時既に時習館の教授であったという事情があつたのではないかと記している。

そのような背景はあつたらしいものの、紫溟がこの時、宣長と相対し、歌の贈答も行っているのは確かである。この贈答歌は、『先哲偉蹟』の紫溟の項や、「高本順大人家集」等にも「於伊勢松坂菅相寺席上贈答」として収められているので、以下に挙げておく。各書によって多少の異同が見られるが、ここでは「高本順大人家集」より引用する。

於伊勢松坂菅相寺席上贈答

菅笠日記の道をとめて鈴屋の大人をとふらひて 順

みよし野の花を分ても問来つる君が枝折の道のまにまに

高本大人のよみて賜ひける吉野山の歌のかへし 宣長

わけ見けむ花のよしの、山よりも深き心のおくそゆかしき

心ある君かわけ、むみよしの、花をしをりに又も行見む

返し 順

山の井の浅き心も君をのみしたふ心はふかきとをしれ

人々の今日の短冊をたまはりて 順

伊勢の海清きなきさに來しかひは言葉の玉をひろめてそ行く

高本先生によみて奉る 大平

肥の国の道の後なる、熊本の殿につかへて、つるき太刀

其名もたかき、高本のはかせの君は、から文の道のはかせと、其の道はそかまに、とき、かせ人をしへつ、朝夕にみち引ますを、神国の神ならふちふ、神の代の直きてふりを、かねてまたたふとみませる、事のたふとさ、

(尚、『遊京雑歌』にはこの他に「探題 遅日 順」として「けふのみとむつびし友も昔の根のながき春日そ猶たのみなる」という一首も収められている)

この寛政九年の会見以来も紫溟と宣長の交流は続いていたらしく、それは宣長の「音信到来帳」(大野晋、大久保正編集校訂『本居宣長全集』第二十卷所収、筑摩書房、昭和五十年八月)にも記録されている。寛政九年の三月三十日(これは『遊京雑歌』の記述からも恐らく紫溟と宣長の初会見の時であろう)に「国府たはこ 一箱／筆 二対」を紫溟が贈つたことに始まり、寛政十一年、享和元年と記録がある。また、真幸宛の書簡(同、『本居宣長全集』第十七卷所収、昭和六十二年十一月)に紫溟の名前が見られることからその交流が判る。以下、その書簡から紫溟に関する箇所を抜き出してみると、

寛政九年七月二日、「一、高本氏へも御面会之節、乍慮外、宜御伝達可被下、奉頼候、」

同年十一月廿五日、「誠二当春は御東遊、緩々得貴意致大慶候、高本氏へも始而得御意、大悦不斜候、」

(*これらは同年の会見の後、国許へ戻った真幸に對しての書簡。)

同十年九月十二日、「古事記伝」の成つたことを知らせ、付題を配つて歌を集めたい、という申し出に続けて、「右題五枚此度差進申候間、御詠出被下度、且御地高本、帆足など其外へ御頼被下、詠出賜り候様ニ致度候、」

同十二年八月八日、「一、高本翁彌無事ニ御座候由、添辞辱存候段、尚又御序ニ宜御伝へ可被下候」

当時既に国学者として名を馳せていた宣長が、弟子の關係者であるとはいへ、地方の儒者である紫溟に對してこれ程に氣を配つていたというのは、特筆すべきことではあるまいか。真幸の弟子である国学者・中島広足もその隨筆『檀園文集』（彌富破摩雄、横山重校訂『中島広足全集』第一篇、大岡山書店、昭和八年四月）で「故鈴屋大人を訪ら

ひて、へだてなく打物かたらひ、国に歸りて後は、便につけてたえずこと通はされき、さばかりからことを学びながら、しかうるはしき大和魂にしてありけるは、いと珍らかなる翁かなとて、鈴屋大人もいたくめでよろこばれけりとなむ、」と宣長の紫溟に對しての稱賛を記している。また、『先哲偉蹟』に載せられている資料には、真幸と交遊のあつた、賀茂真淵の門弟・橘千蔭が、

李氏（紫溟）のよみ給へりとして、長き短き歌ども、長瀬主が見せ給へるに、いとかむつ世のみやびすがたにして、めでたしとも、めでたくなん、いかでことくはへ待むや、あが加茂の大人にこと問し人々も、こゝには中々に残少くなりにて侍るを、千里のをちにかく古ぶりの真玉なす光は残れりけるよと、よろこほひにたへずなん、

と紫溟を賞賛する言葉を送り、

飛鳥のつばさしあらば速日別速くも行てこと問はましとと詠んでいる。紫溟もそれに感激して、

こは身におはぬものから、夜ひかる玉をゆくりなくえたらん心ちして、いともぞかしこき、是をたつきに、たえずこと、はまほしくて、

濱千鳥あとしかはゞ大空を渡る翼はよしやなくともと返している。

更に、邇るが真幸が寛政八年に宣長の許へと出立する際に紫溟の贈った文、「送言草」には、紫溟の真幸への期待、ひいては紫溟自身の和学に対する思いの強さが表れている。少々長くなるが以下一部を抜粋していくと、

「大御国の人の物学は、漢籍をのみ読みて、事足ぬべきにはあらず、御国の書をも、つばらに見るべきものなめり、」と始まり、「凡そ人には、必ず五品のやから備る」としてその五品をそれぞれ挙げ、「然れば、物学びせん輩、唐の文を読ては、同じ道の理を深く極め、御国の書を見ては、異なる形と物とを、つばらに考へぬべきものになん、」と、「ふることふみ等を見ては、古の世の形をしり、／古事記、日本紀の類を云ふ、唐の書経、春秋などの如し、」というように我が国と唐国の史書、詩歌、律令格式を挙げて、「そを本にして、国の政をも、家の事をも、取り行ふべき事になん」と説く。ここまでで紫溟が和学・漢学の両方を尊重するべきだとしていたことが窺い知れよう。

かくはいへども、己れらは、唐書の業に暇なし、あれ其道にかしこからん人もがたと、年頃思ひたまひつるに、長瀬の眞幸なん、其人には有りける、一とせ神風の伊勢にゆきて、本居の大人にこと、ひ、鳥が鳴く、吾妻にいたりて、多くの友に交らひて、学の道、いよ、

す、めたり、同じ国同じ里に、かゝる人をしも、えつること、タテマ靈幸、神の助給ふにこそと、いともうれしく、朝よひ語りあはするに、玉鋒の道を求むる心、山のゐのあかずして、今一度、大人の鈴屋を問ひ、大江門の友達をも見ばやと、思ひ立ちけるを、しばしの別も、をしけれども、たゆみなき、志をめで、己れもす、めなどしかば、彌思定めて、明日の足日に、門出せばやとなんいへる、

この一節と、続く「いでや人を送るに、言葉をもてすと云る、古事あればとて、愚なる心に思へることどもを、すゝろにかきつくれば、あやしう、あげつらひがましきも、唐ぶみの心ならひならんかも、」といった言葉からも、自身はあくまでも漢学の徒であるが、真幸には和学を十分に学び、実としてほしい、という念が窺える。それはそのまま、紫溟の和学への強い思い入れと取れるのではないか。

しかもこの「送言草」は、天皇に観覧されるという名誉を紫溟に齎す。この出来事は『続近世叢語』巻之八にも掲載されているので、該当箇所を引用する。

李紫溟善国文及歌、寛政中、其所作国文、伝入禁掖、天皇顧問侍臣曰、不凶田舍能出斯珍矣、肥人以為荣、紫溟因自号田舍珍夫云、

文中の「寛政中、其所作文」とあるのが「送言草」のこと。「先哲偉蹟」や「高本順大人家集」の序文の記述等も参照し説明を加えると、京、伊勢へ遊学していた真幸が京に滞在していた時のこと、小川某という人物と親交があった。この人の妻・伊笹は禁掖（後宮）の針医であったが、彼女が「送言草」を目にし、いたく感嘆したので、それを携えて皇后に供え奉った。すると机の上にあつたそれを上皇が観覧され、「田舎によくこのような珍しいものが出で来たものだ」と感嘆して宣った。後に真幸がこの出来事を伝えた所、紫溟は感激し自ら「田舎珍夫」と号したという。

第四節 後代への影響

最後に、紫溟の和学の尊重が、後の人々に与えた影響に就いても述べると、弟子である長瀬真幸は勿論、真幸の弟子である国学者・中島広足、林桜園といった人の存在が大きいようだ。広足（一七九一—一八六四）は歌学の才に秀で、熊本のみならず他国にもその名声は広まっていた人物だが、その評判を受けて藩は広足を時習館の国学師範に召している。また、彼は数多くの著書を残しており、後進に影響を与えた。その中の一つ、前掲の『樞園文集』で廣足は紫溟を「から国人の末、から学の博士にて、斯うるはし

き日本魂もたるもありけり」と称えている。同じく真幸の弟子の桜園（一七九七—一八七〇）は、私塾・原道館に於いて古典学を主として勤皇精神の養成を行った。明治維新の肥後勤皇党の多くは原道館の門下にあつたとされ、紫溟、真幸と受け継がれた国学に関する知識の一端は、ここに至つて勤皇思想となつて結ばれた、と言えるだろう。紫溟に関しては、前述のように、寛政四年の国学相誘の建言に就いて意見している。このようないわば孫弟子達の思想を以て、紫溟を「肥後皇典学の祖」と称する。「皇典学」とは、皇国の典籍を学ぶ学問、つまり国学のことである。

更に、尊皇思想家・高山彦九郎（一七四七—一七九三）の来熊の際の紫溟との交流に就いても触れておこう。この時の様子は、彦九郎の日記『筑紫日記』（萩原進、千々和実編纂『高山彦九郎全集』第四卷、高山彦九郎遺稿刊行会、昭和二十九年六月）に詳述されている。彦九郎は寛政四年の正月を藪孤山宅で迎え、薩摩に発つ二月二十四日まで熊本に滞在する。同年の七月二十八日に再度熊本を訪れ、八月二十一日に去るのだが、この日記には熊本滞在の間、彦九郎が紫溟宅に泊まり、紫溟やその門人達と語らうという記述が多く見られる。

紫溟自身の日記も存在はしたが、『先哲偉蹟』には彦九郎に関する箇所を載せて、「高本慶蔵先生、日記数十卷、

丁丑の変焼失、燼余一冊あるを借りて読たり。」と註してある。丁丑の変とは明治十年（一八七七）の西南戦争のことであり、戦禍によって紫溟の日記や著述はその殆どが烏有に帰してしまつたらしいのだが、その断片をこの『先哲偉蹟』や、『略伝』に一部見ることが出来る。彦九郎に關しての記述はほぼ内容に変わりは無いが（彦九郎の方が詳細である）、彼とのこの交遊も紫溟が幕末の熊本勤皇思想の祖とする考えの一助となつてゐるのであろう。

結論

紫溟が儒学者として優れてゐた一方で、和学者としても優れた面を持つていたことは、これまでの研究でも言われてきたことではあるが、本稿では、その根柢を改めて提示することが出来たかと思う。しかし、例えば『略伝』の結論で語られるように、紫溟の「国学者」としての面のみを強調するのは、果たして正しい捉え方と言えるだろうか。これまで見てきたように、紫溟が和学の面でも優れ、その影響を後代、特に幕末期の熊本藩に与えたのは確かであるが、紫溟という人物を考える上では、その漢学の面がやや軽視されているように思われる。和漢の学を共に修めてゐることは、同時代の学者としては寧ろ当然の姿勢である

訳だが、彼の場合はこれまであまりに「国学」に偏つて見られることが多かつたようである。前掲の「送言草」からも、紫溟が和漢の学のどちらかをより尊重しているということではなく、どちらも尊重するべきだとしていたことが窺えるし、阿蘇惟馨に頼まれ草した阿蘇氏家塾の記にも、紫溟はこう記している。

惟茲家塾、所以教祠官及其子弟也、故以国学為主、漢学次之、蓋雖国書、蓋假漢字、若不知漢字、何以読国書哉、第其假之也、有仮音者、有仮義者、仮音者、固不論其義、仮義者、亦義或不同、不可一概而論也、是以有国学師、有漢学師、各就其師、而学之可矣、謹勿膠柱、諸生其勉旃、

これもまた、和漢の学を共に学ぶことを説いてゐるのではないか。それ故に、どちらかに偏つた見方で紫溟の学問を検討すれば、見誤ることになるのではないだろうか。きちんと彼の漢学の位置付けをすることによつて、紫溟の他と比べて突出した点である和学観を史料の再検討を含め考察したことで、改めて彼の学問がきちんと評価され得る筈である。また、それが為されることにより、同時代的な横の繋がり、また歴史の一点としての縦の繋がり、その中にあつて紫溟がどのような位置にあつたのか、それを定義することが可能となるだろう。

紫溟のような人物が才を重用され、藩学を中心となりその流れを作ったということは、紫溟や彼に関わった人物という個人的な視点からだけでなく、藩全体、藩同士の学問の交流についても更に論じる余地があるということである。今回見てきたことは紫溟の周囲のほんの一部であり、これを足掛かりにして、より広範囲かつ密な学問大系を構築していくことが、今後の課題である。

注

注1…恐らく末年（一七六三）から明和初年（一七六四）より隠棲生活が始まったものであろう。

「紫溟先生遺稿」卷之五（「肥後文献叢書」卷二所収）に「失題」として「蘇嶽九州之 鎮也、（中略）順今衰病、不得復言詩、但少時寓居其山址、蓋七八年、（後略）」とある。

注2…「萬松廬八首」は「紫溟先生遺稿」卷之一に所収。

注3…上妻文庫は故上妻博之氏が県関係の資料を手写されたものを「秉燭雜録」と名付けて編纂、昭和四十三年に遺志により熊本県立図書館に寄贈されたもので、活字になつていない紫溟関係の文書も幾つか見られる。例えば、『古典籍総合目録』（岩波書店）に「秋月郷土館 近世中期写 一冊」となっている「詠月三十首」（藪孤山・藪孤山女 詠、高本紫

溟 批）も、恐らく上妻文庫蔵の「詠月三十題」と同じものではないか。但し上妻文庫では孤山と孤山の姉が詠んだ、となつている。

なお、ここに挙げた「遊京雜歌」は、熊本県立大学大学院文学研究科論集第一号（平成二十年九月）に翻字を全文掲載している。